

大方高等学校 — 飯盛研 VITA+ コラボレートプロジェクト

2007年度 ケースメソッド・ワークショップ シラバス

担当：大方高等学校 と 慶應義塾大学 SFC 飯盛研究室「VITA+」(ヴィータプラス)

主催：特定非営利活動法人高知県西部 NPO 支援ネットワーク

期間：2007年8月27日～2007年12月(全10回・下記に予定を記載しています。)

※授業時間は、16時10分～18時

場所：高知県立大方高等学校(SFCとの遠隔授業も含む)

1. 主題と目標

本プロジェクトでは、VITA+が開発したケースメソッドにより、地域の方々と大方高校の高校生が議論することで、高校生のアントレプレナーシップの育成を目指す。ここでは、高校生がケースメソッドを受けるだけでなく、地域の方々も高校生と同じようにワークショップに参加することにより、大方高校を中心とした、「地域の学びの共同体」を作り出す。

ケースメソッド・ワークショップの中では、高知県の事例を題材としたケース教材を用いる。この教材を事前に熟読し、高校生と地域の方々が一緒に議論し、自分から考える力や問題発見、問題解決の力を鍛える。さらに、参加者が所属する地域を題材としたケース教材と地域方々の参加により、地域に対する意識や理解、愛着が育まれることを期待する。

本ワークショップの構成は、事前、事後の遠隔交流と大方高校の場によるケースメソッド・ワークショップを組み合わせたユニットを3回と、最後は、ケースメソッドをもとに、実践(T シャツアート展)に向けた提言発表会も組み合わせた1回、計4回となっている。

2. 対象

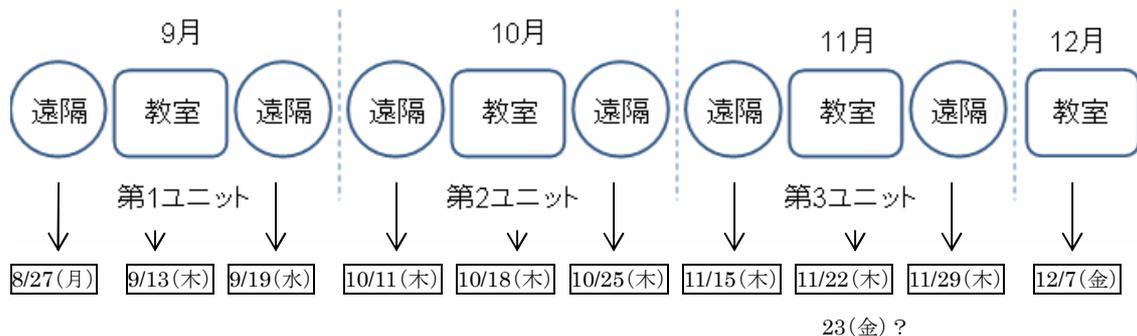
生徒会、有志の高校生、地域の方、大方高校の教職員

合計 20 名程度

3. ケース教材(予定)

- ・『紅葉前に剪定された土佐道路の木～小学4年生の貴子ちゃんのある日～』
- ・『孤島的美しき「陸の孤島」で走り続ける森田支配人の決断□～ネスト・ウエストガーデン土佐～』
- ・『ゆずの村「馬路村」の魅力に迫る』(もしくは『道の駅ビオス大方』)
- ・『NPO 法人砂浜美術館～T シャツアート展 2007年～』

4. スケジュール



●第1ユニット(9月)【事前遠隔(8/27)→ケースメソッド(9/13)→事後遠隔(9/19)】

『紅葉前に剪定された土佐道路の木～小学4年生の貴子ちゃんのある日～』

【目的】

普段から問題意識を持つことの大切さ、おもしろさに気づいていただき、一つの事例についても様々な意見があることを知っていただく。これから、問題発見、問題解決していくための導入。

【ケースの概要】

高知県の市街地を貫く土佐道路には、プラタナスの街路樹が植えられていた。高知県高知市内に家を構える河上家からは、すぐに土佐道路に出ることができた。河上禎介氏(貴子ちゃんのおじいちゃん)は、毎年、その街路樹の美しさを楽しんでいた。今年もカメラを片手にプラタナスを見に行ったところ、紅葉する前になんと枝から剪定されていた。おじいちゃんが怒っているのを見て、孫の貴子ちゃんは、何か理由があるにちがいないとおばあちゃんと調べ始めた。そして、これを解決するためには、どうすればよいのだろうかと考えていた。

●第2ユニット(10月)【事前遠隔(10/10)→ケースメソッド(10/17)→事後遠隔(10/24)】

『孤島の美しき「陸の孤島」で走り続ける森田支配人の決断□～ネスト・ウエストガーデン土佐～』

【目的】

地元のホテルの問題点を見つけ、解決策を考えるとともに、森田支配人のように頑張っている方が地元にいることを知っていただく。

【ケースの概要】

森田俊彦氏(43歳)は、地元で有名な建設会社に勤め、漁港建設という重要なポストを任されていた。ところが、平成16年5月、建設業とは全く異なるレストランホテルの支配人に任命され、観光業という未知の世界での挑戦が始まった。危機的状況を立ち直すことを期待され派遣された森田氏の様々な取り組みにより、地元のお客様の評判が良くなり、県外のお客様がつくようになった現在も赤字ではあるが、徐々に改善の兆しが見えてきた。また、このホテルの建て直しは、黒潮町の活性化に一石を投じるという意味で、大切な使命であった。しかし、会社に対しての責任も強く感じていた森田氏は、自分に期待をかけてくれた社長に、これ以上迷惑をかけたくなかった。また、勤務が不規則で休暇も思うように取れず、体調を崩すこともあった。森田氏は、家族6人で時間が取れないのも悩みの種であった。そんな森田氏には、ある覚悟があった。

●第3ユニット(11月)【事前遠隔(11/15)→ケースメソッド(未定)→事後遠隔(11/29)】

『ゆずの村「馬路村」の魅力に迫る』(もしくは『道の駅ビオス大方』)

*ゆずの村の場合→

どうして成功しているのか、視察がたくさん来るのかを探ることで、地域が元気になるとはどういうことなのかを議論する。また、そのためには何が大切で、それを生み出すためにはどうすれば良いのかを考える。

*道の駅ビオスの場合→

道の駅の問題点を見つけ、解決策を考えるとともに、地域の交流のあり方について考える。

●第4回(12月)【ケースメソッド・ワークショップ】

『NPO 法人砂浜美術館～T シャツアート展 2007年～』

【目的】

現状における問題点を挙げ、地域のイベントとしてどうあるべきかを議論するとともに、地域の一員として何ができるかを考える。

個人、あるいはグループごとに考えた方策を、NPO 法人砂浜美術館の村上氏、畦地氏、出会いの里の方など地域の方々に発表する。

【ケースの概要】

NPO 砂浜美術館が主催する T シャツアート展は、2007年で第19回を迎えた。昨今では、全国各地から毎年1000枚以上のデザインの応募があり、ゴールデンウィーク中の来場者は約6000名を数えるまで成長した。応募者、来場者の多くは、砂浜美術館のコンセプトに共鳴し、T シャツアート展の継続を楽しみにしている。また、砂浜美術館を運営する黒潮町役場の畦地和也氏も何とか継続したいと考えている。しかし、昨今の厳しい財政状況から黒潮町の助成には限界があり、畦地氏は今後の方策を検討しなければならなかった。

5、授業担当者の紹介

VITA+ (ヴィータ・プラス)

私たちは、慶應義塾大学、飯盛義徳研究室のもと、「高校生のための地域アントレプレナーシップ育成教材」を開発するプロジェクトとして、立ち上がりました(2005年4月)。これまで、地域の方々と共に、高知県立大方高等学校をはじめ、佐賀県立佐賀商業高等学校、佐賀県立牛津高等学校、和歌山県田辺工業高等学校で、ケースメソッド授業の実践や講演を行なって参りました。

私たちは、このような活動が、地域の方々や高校生の元気や活力の一つになればという思いで活動しております(現在17名)。その元気の源であるVitaminの接頭語を取ったのが、「VITA+」の名前の由来です。今年度の高知チームは、高知県出身の藤本文子(土佐高校出身)を中心に活動しております。

<今回の授業を担当させていただくメンバー>

- ・藤本文子(総合政策学部3年)
- ・井上博敬(環境情報学部4年)
- ・吉岡淳(環境情報学部3年)
- ・黒川拓人(環境情報学部1年)
- ・西田みづ恵(政策・メディア研究科修士1年)